

導入 2

東アジア世界における宗教的寛容と公共性

< 内容 >

- 1 . 問題 - 東アジアにおけるキリスト教の比較研究 -
- 2 . 宗教的多元性と公共性
- 3 . 公共性をめぐる東アジアの多様性
- 4 . まとめ

1 . 問題 - 東アジアにおけるキリスト教の比較研究 -

- 1 . 21 世紀 C O E プログラムによる研究企画

「グローバル化時代における多元的人文学の拠点形成」

研究班「多元的世界における寛容性についての研究」

多元性（ 対立・相克・排他性 ）と寛容、寛容の多様性と可能性

寛容から公共性へ：寛容をめぐる議論の深化と理論形成

東アジアと宗教

思想研究とフィールド調査

- 2 . 研究企画「公共性の観点から見た中国と韓国のキリスト教会の実態調査」
- 3 . 企画の概要

中国（上海）と韓国（ソウル）における大規模教会（会員数 1 万人を越えるメガ・チャーチを中心に）の活動について実態調査を行い、いわば下からの公共性の形成と言うべき動きが実際にどのように展開しているかを明らかにする。

「多元的世界における寛容性についての研究」研究班では、これまで現代世界の多様な多元的局面における諸問題を寛容性という観点から思想的また社会学的方法論によって検討を行ってきたが、今回大規模教会の実態調査をぜひ実施する理由は、以下の通りである。会員数 1 万人を越える大規模教会では、日曜日の礼拝を中心に会員の日常生活の全体（相互扶助的な活動、文化活動、地域貢献などを含む）をカバーする活動が行われているが、それは、その教会内部に親密圏（家族を基盤とした）から公共圏に及ぶ公共的な場を形成する共に、教会外部の諸団体・地域・行政との緊密な関係を構築するに至っている。こうした大規模教会の活動は、西欧近代において確立された政教分離を制度的な基盤としつつも、公と私の単純な二分法の枠内には収まりきれない、多元的世界における宗教の新しい動向を示しており、多元性の状況における公共性という問題を理論的に検討する際の重要な手がかりになることが期待できる。

- 4 . 予備調査と日程

- (1) 第一回打ち合わせ：調査研究の趣旨と方法についての議論、予備調査の開始
- (2) 第二回打ち合わせ：

予備調査についての報告と本調査の実施計画の細部についての確認

(3) 第三回打ち合わせ：上海調査の総括とソウル調査の検討

(4) 本調査：2006年1月から2月にかけて、上海とソウルで実施

2. 宗教的多元性と公共性 3のBへ

<調査の理論的基礎>

1. 宗教的多元性と寛容 公共性：寛容が現実化する場

2. キリスト教と公共性

キリスト教における隣人愛の射程：共同体内部での助け合い 共同体の外部へ
キリスト教会内の公共性 教会外の公共性
個人・家族から「神の家族」へ

東アジアにおけるキリスト教の歴史から

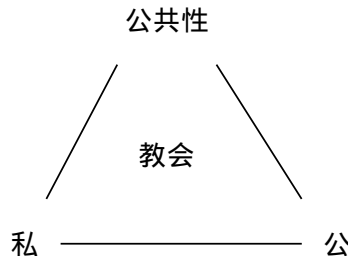
近代化への積極的寄与、教育・医療などにおける貢献

3. 公共性をめぐって

西欧近代の政教分離システムにおける「私/公」の二分法とその限界
「善/正義」「格律/倫理性」

中間的なものとしての公共性（市民的共同体）

下からの公共性の実現に対するキリスト教の動向



宗教的多元性と寛容の議論を進展させるような新しい公共性論へ

3. 公共性をめぐる東アジアの多様性

<作業仮説>

教会と公共性との関わりは、次のファクターによって規定される。

- ・ 国家の宗教政策、政教分離制度の実態
- ・ 教会の規模
- ・ 教派的背景

ここから、日韓中におけるキリスト教の多様性を分析する。

A. 上海での調査からソウルでの調査へ

1. 上海での調査内容

(1) 国際礼拝堂・沈承恩牧師

上海市基督教景林堂・余江牧師

復旦大学哲学系・孫向晨副教授

(2) 概要

中国のキリスト教に関して、それぞれ異なる視点からの説明を聴くことができ、有意義であった。沈牧師と余牧師からは、中国キリスト教会の牧師という同一の立場に立ちつつも、教会での位置や年齢などの相違による微妙な違いが感じられた（現在のキリスト教徒の数などについての差）。沈牧師の話には、中国キリスト教全体についてのマクロな視点（今後の課題として、神学思想の形成や海外のキリスト教との関係構築が挙げられるなど）がみられる。中国キリスト教会（三自愛国教会）内でのポジションによるものと思われる。それに対して、余牧師の場合は、自分が牧会する教会の独自の活動への意欲が感じられた。

二人の牧師が、基本的には中国におけるキリスト教のいっそうの発展を強く意識しているのに対して、復旦大学の孫氏の場合は、より客観的な視点に立っている。とくに、諸宗教との関係を含めて、キリスト教の発展の可能性についてはより冷静である。

こうした微妙な差はあるが、国家の宗教政策という枠組みの存在やキリスト教内外の主体的関係構築の限界という現実の中で、キリスト教が着実に浸透しつつある状況はよくわかった。

(3) 教会の概要

- ・歴史、規模、年齢構成
- ・礼拝以外の諸活動の内容
- ・教会内のグループと活動（日本で言えば、教会学校、聖歌隊、青年会、婦人会、壮年会など）

今回訪問した上海の教会は、1980年代以降の国家の宗教政策の変化の中で苦勞して教会を再建し、現在は着実に規模を拡大しつつある。いずれも1万人前後の信徒が所属し、年に、300名から500名の受洗する。教会内のグループ活動も盛んである。年齢構成や性別については、中高年の女性が多い。

(4) 教会内の信仰者の交わり、教会内における信者の相互の支え合いに関して

老人に対する特別のプログラム（老人会、敬老礼拝）などが存在する。地域割りの活動も存在し、教会員の消息情報の収集や訪問などが行われている。しかし、活動は経済面などに踏み込んだ助け合いにまで展開していない。また、活動は基本的に各個教会内で完結しているようである。地域における牧師同士のつながり（信徒情報の交換や講壇交換を含めて）は存在するが、信徒レベルでのつながりはほとんどみられない。予算面でも、各個教会は自立している。また、教会外への組織的で積極的な伝道も行われていない。

活動を内部において完結させるのは、国家の宗教政策の影響か（信徒レベルでの各個教

会を超えた交流の危険視？)、あるいは教会側の自主規制か。

(5) 教会外の諸団体や地域共同体との関わり

他宗教との関係はほとんど問題化していない、意識されていない。また、大学など外部団体との関わりも、個人レベル以外には存在しない。神学校と復旦大学との関わりも、個々人のレベル。

(6) 教会内あるいは教会外の公共性に関して

教会内と教会外との有機的なつながり存在しない。また教会内でも、公共性は、経済面を含めた全体的なものとしてではなく、信仰面の関わりに限定されている。一方におけるキリスト教の発展と、他方における伝統的なキリスト教会のあり方(隣人愛・社会实践や伝道活動)とのずれ、という二つの面が存在し、それが今後どのような展開を生むことになるかに注目する必要がある。政教分離の理想形態? いずれにせよ、中国キリスト教の最大の問題は、国家と教会の関係である。

(7) 大学

キリスト教研究は想像以上に盛んである。研究は、基本的には、西洋思想の研究の一環としてなされ、中国キリスト教史の研究もなされつつある。研究者の海外留学についても、日本と同様の現状(アジアとの関わりは希薄)。中国キリスト教思想の主体的な形成の場は、どこになるのか。

2. ソウルでの調査

(1) 中国とは異なる状況下におけるキリスト教

(2) 教会内あるいは教会外における公共性の積極的な構築が予想される 実態は

(3) 国家あるいは民族との関わり、あるいは他の宗教との関係
対話、対立、無関心

B. 宗教的寛容から公共性へ

1. 多元化そしてグローバル化によって特徴づけられる現代世界において、宗教は民族とともに、しばしば様々な対立の主要な要因とみなされている。実際、宗教の相違を背景に、あるいはそれを根拠として、紛争が引き起こされる例は少なくない。こうした状況の中で、宗教的多元性の状況下における寛容(とくに宗教的寛容)の可能性とその実現に向けて、理論的また実践的に多くの努力がなされつつある。現代キリスト教思想研究の主要課題の一つはここにあると言える。

2. 宗教的寛容へのアプローチ: 多様な問題群の全体を包括的に扱うのではなく、具体的かつ実証的に検討可能なテーマから議論を始める。

- ・西欧近代の宗教状況を特徴づける「信教の自由」と「政教分離」という問題
- ・東アジアの宗教多元性下における寛容という問題

3. 宗教的多元性(とくに、宗教間対話などの問題)と公共性や公共哲学といった論点を結びつける試み、「宗教的寛容性から公共性へ」

4. 「公共性」(publicness)の意味、齋藤純一『公共性』(岩波書店)

第一は、「国家に関係する公的な(official)ものという意味」であり、この意味における「公共性」に対応するものとしては、「信教の自由」という意味での宗教的寛容を可能にする条件として社会システムに課せられた「政教分離」システムにおける、「教」(church)に対する「政」(state)を挙げることができるであろう。「この意味での「公共性」は、強制、権力、義務といった響きをもたずである」(ibid., ix)との指摘は、その通りである。第二は、「特定の誰かにではなく、すべての人々に関する共通のもの(common)という意味」である。後に指摘するように、この意味における「公共性」の問題点は、「すべての人びとに関する共通のもの」に関して、この「すべての人びと」の範囲をどのように設定するかによって、たとえば、宗教的寛容の内容が大きく異なってくるという点である。第三は、「誰に対しても開かれている(open)という意味」であり、アーレントが「公共的」という言葉について論じる「現われの空間」(the space of appearance)は、この意味に対応している。

5. 信教の自由と政教分離：西欧的な近代国家であるか否かをわけるメルクマール

ソビエト社会主義共和国連邦憲法(基本法)でも(第52条)、また中華人民共和国憲法でも(第36条)、同様である(宮沢俊義編『世界憲法集』岩波文庫 1983年)

6. 政教分離の多様性：アメリカとフランス

7. 「公と私の二分法」(公私二元論)の限界 「政府の公/民(人々)の公共/私的領域」の相関的三元論に立つ新たな公共哲学

8. 近代的な社会システムの形成期(たとえば、17世紀イギリス)において、教派的な多元性を背景とした対立構造を乗り越えて市民社会の秩序を構築するために、道徳的あるいは宗教的信条 - 近代以前の共同体は単一の実体的な「共通善」の理念(道徳的あるいは宗教的信条に表現された)を基盤として秩序化されていた - といった対立と混乱の要因を、国家が介入できない私的領域に編入することは、形成途上にあった近代的な市民社会の秩序形成としては不可欠の手続きであった。

9. 近代自由主義の原則の問題視：リベラリズムとコミュニタリアニズムの論争

10. 「宗教的寛容性から公共性へ」という議論が意図しているのは、近代の宗教的寛容論が依拠する公私二元論の限界を超えて、新たな公共性理解を宗教の視点から構築することなのである。それは、信教の自由や政教分離を核心とする近代的なシステムが、まさに宗教的多元性(教派的多元性)とその状況下での寛容論という問題連関において歴史的に形成されたものであり、また現代の宗教的多元性における対立の主要な場面が公共的な領域であるという認識に基づいている。

11. 公共性の多重性 - 公共性とは関係概念である -

先に公共性の一つの含意として、「すべての人びと」に「共通なもの」という意味を挙げたが、この「共通のもの」とは、「すべての人びと」の範囲をどう設定するかによって、多様な形態をことになる - ここに曖昧さが生じる - 。たとえば、キリスト教共同体(教会)は、公私二元論の枠組みにしたがえば、公的領域に属する国家や公共団体に対して、私的領域に位置付けられることになる。しかし、キリスト教共同体は決して単純に私的領域として規定することはできない。

メンバー数が数万人を超える教会（メガ・チャーチ）の場合：

韓国ソウル中心部に位置する永楽教会（会員数は5万人を超える）などは、ソウル市と連携して福祉事業を展開しており、こうした現実には、公私二元論の枠組みでは捉えることができない。つまり、メガ・チャーチのような大規模の教会は、それを「すべての人びと」（一つの全体）として位置付けるならば、個人としての教会員にとっては、「共通のもの」としての公共性を十分に有していると考えられるのではないだろうか。これは、メガ・チャーチほどの規模を待たない教会共同体に関しても原理的には妥当する議論であり、「共通なもの」という意味での公共性とは、「すべての人びと」の範囲をどのように設定するかに関連した関係概念と言うべきであろう。

この視点から言えば、公私二元論における私的領域に位置付けられる宗教も、その内部での公共性を論じることが可能であり - 公共性のもう一つの意味である、「開かれている」こととの関係が問題になるが - 、また国民国家の存在も、国際社会というグローバルな範囲に位置付けるならば、いわば「私的領域」ということになる。国家と宗教を公私として二元的に単純に分離する見方では、宗教状況の現実性を捉えるには無理があると言わざるを得ない。「私的領域と公的領域との境界は、所与として決定済みのものではなく、不断に構築され変化していくものである」（ムフ[1998]、102頁）。公的と私的、あるいは公共性は、多様なレベルを相互にリンクさせつつ、多重的に捉えるべきものであり、「政府の公/民（人々）の公共/私的領域」の相関的三元論は、それを理論化する一つの試みといえよう。

介護、ホームレスといった問題は、私か公か。

12. 公共性の生成論

以上のように、宗教的現実の観点から見て、公共性が関係的あるいは多重的なものであるとするならば、公共性についての議論は、さらに公共性の生成論へと展開されねばならないであろう。つまり、私的領域（個人 - 家族といった親密圏）、公共性（宗教共同体）、公的領域（公共圏）を繋ぐ、下から上への、同時に上から下への双方向的なダイナミズムの中に、公共性の生成を位置付けるという作業である。

東アジア・キリスト教を家族という視点から分析：家族のメタファー化という問題

「教会という信仰共同体は単なる個人としての信仰者の集合体ではなく、「第三のもの」への共通のコミットメントによって結び直された家族を重要な基盤としているのであって、ここに下からの公共性の原型を見ることができるようになる」。

死者儀礼との関連においてははっきりと確認できるように、「家族」とは、宗教的多元性の状況下における対立が顕在化し寛容が問われる場所であるとともに、公共性の生成基盤と成りうる場なのである。家族と宗教共同体の関わりは、宗教的多元性、対立・抗争、寛容を具体的に論じるための重要な素材であると共に、下からの公共性の構築の原点として位置付けることができるようになると思われる。宗教共同体の分析を通して、個人 - 家族の私的レベルと市民社会・国家という公的レベルとを媒介する独自のレベル（公共性のレベル）の存在を明確化することによって、多元性と寛容性をめぐる議論を一步前進させることが、期待できるように思われる。これが、「宗教的寛容性から公共性へ」という論点の意図するところにはかならない。

韓国におけるキリスト教：公共性の生成論にとっての重要な題材

<文献>

- (1) 宗教的寛容をめぐる問題群の広がりに関しては、たとえば次の文献を参照。
芦名定道 「宗教的寛容・問題群の構造 - 問題の整理に向けて - 」、『宗教と寛容』宗教的寛容研究会 2005年、3-6頁
スーザン・メンダス（谷本光男他訳） 『寛容と自由主義の限界』ナカニシヤ書店 1997年
- (2) 東アジアの宗教的多元性の状況下での寛容の問題については、次の拙論を参照。
芦名定道 「日本の宗教状況と宗教間対話の可能性」、Journal of the Institute of Asian Area Studies, 釜山外国語大学 アジア地域研究所 2004年、1-18頁
- (3) 宗教間対話と公共性との関わりについては、次の文献を参照。
稲垣久和 『宗教と公共哲学 生活世界のスピリチュアリティ』東京大学出版会 2004年
星川啓慈他 『現代世界と宗教の課題 宗教間対話と公共哲学』蒼天社出版 2005年
なお、星川編の『現代世界と宗教の課題 宗教間対話と公共哲学』の内容に関しては、次の書評を参照。
芦名定道 「文献紹介：星川啓慈他 『現代世界と宗教の課題 宗教間対話と公共哲学』蒼天社出版」(<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub14D15.pdf>)
稲垣久和・金泰昌編 『宗教から考える公共性』東京大学出版会 2006年
大貫隆・金泰昌・黒住真・宮本久雄編 『一神教とは何か 公共哲学からの問い』東京大学出版会 2006年
- (4) 公共性をめぐる諸問題についての包括的な議論については、次の文献を参照。
安彦一恵・谷本光男編 『公共性の哲学を学ぶ人のために』世界思想社 2004年
- (5) 政教分離の多様なあり方に関しては、次の文献を参照。
阿部美哉 『政教分離 日本とアメリカにみる宗教の政治性』サイマル出版 1989年
- (6) 公共性についての哲学の試みについては、次の議論を参照。
山脇直司 『公共哲学とは何か』ちくま新書 2004年
井上達夫 『他者への自由 - 公共性の哲学としてのリベラリズム - 』創文社 1999年
- (7) 合意形成の問題点については、次のムフの著書を参照。
シャンタル・ムフ（千葉眞他訳） 『政治的なるものの再興』日本経済評論社 1998年
「ロールズの抱える問題」「紛争、敵対関係、権力関係は姿を消し、政治の領域は道徳の拘束のもとでの私的利害間の合理的な交渉プロセスに矮小化されてしまう」(223)、
「いかなる合意も、またいかなる客観的かつ差異的なルール体系も、その最も本質的な可能性として、強制という次元を伴っているのである」(285)、「多元主義的民主主義の固有の性質は、支配と暴力の欠如にあるのではなく、それらが制限され、かつまた争われることを可能にするための一群の諸制度の確立にある」(295)、「われわれに課せられた作業とは、社会的諸関係に本来的に備わっている暴力と敵対性という構成要素を敬遠するのではなく、そうした攻撃的諸力を緩和し転用することのできる諸条件を、また多元主義的民主主義の秩序が可能となる諸条件を、どのようにして創出するかを思考することにほかならない。」(310)

(8) 東アジアの家族・死者儀礼については、次の拙論を参照。

芦名定道「東アジアの宗教状況とキリスト教 - 家族という視点から - 」

『アジア・キリスト教・多元性』創刊号 現代キリスト教思想研究会 2003年、
1-17頁

芦名定道「第2章 家族の危機と再生」「第3講 思想」

芦名定道・土井健司・辻学『改訂新版 現代を生きるキリスト教』教文館
2004年、154-155頁

芦名定道・金文吉「死者儀礼から見た宗教的多元性 - 日本と韓国におけるキリスト教
の比較より - 」、『人文知の新たな総合に向けて(21世紀 COE プログラム「グロ
ーバル化時代の多元的人文学の拠点形成」)』第二回報告書 [哲学篇2]

2004年、5-23頁

4 . ま と め

今後の課題

- ・日韓中の比較を体系的に展開すること
- ・政教分離、宗教的寛容(信教の自由)についての近代的な議論を、理論的に修正すること より適切な理論構築に向けて